

ニューヨーク州に生まれの S.W. ウィリアムズ (1812–1884) は、1833 年アメリカン・ボード (The American Board of Commissioners for Foreign Missions) に派遣され、広東のミッション印刷所の責任者をつとめ、英字月刊誌『中国叢報』(*The Chinese Repository*, 1832-1851) の編集と出版に携わった。1837 年のモリソン号事件にも関わり、日本人漂流民の祖国送還を助けようとした。1853、1854 年の日本遠征で首席通訳官として活躍し、ペリー提督の絶大な信頼を得た。1856 年以降の 20 年は、中国駐在のアメリカ外交官を務めていたが、1858 年「米中天津条約」の交渉過程で清政府側にキリスト教布教を公認させたことや、蒲安臣公使時代 (Anson Burlingame, 1861–1867) における米中協力関係の構築に尽力したなど、実務上の成績を多く積んだ。帰国後の翌年すなわち 1877 年、エール大学最初の中国語中国文学教授に任命され、そして 1881 年に年アメリカの聖書協会会長や東洋学会会長も務めた。そのライフ・ワーク『中国総論』(*The Middle Kingdom*) は 19 世紀のアメリカ東洋学の最高水準を示すものとして、いまでも学界に珍重されている。

本論文は、医療や教育を手立てとするアメリカ・プロテスタント宣教師の中国布教や十九世紀中葉のアメリカの東アジア外交に関わったウィリアムズの感想と行動、日本人漂流民、中国人契約労働者や華北地域の大旱魃の罹災者などのためのウィリアムズの戦い、および東アジア伝統文化と開明的頭脳に対するウィリアムズの賞賛などを検証したのち、次のように論じている。

中国の鎖国政策を徹底的に変えさせた西洋諸国の共闘に積極的に参加したウィリアムズは、その過程で行われたイギリスのアヘン貿易、「教案」(宣教師・改宗者と反キリストの中国民衆との紛争) に対するフランス外交官の行き過ぎた介入、およびマカオにおけるポルトガル人と一部のアメリカ人の残忍なクーリー貿易を強く批判していた。1860 年、アメリカの国会が中国の賠償金の余剰金と利息の一部を中国に返還しようとした際、ウィリアムズはそれをもって中国で「米華書院」(American-Chinese College) を設立し、米中の相互理解と通商貿易を促進しようと提案し、リンカーン大統領の賛同を得た。最終的には実現できなかったが、その提案は 20 世紀前期の義和団賠償金による中国人アメリカ留学プログラムの先駆けと見ることができよう。

そして、1870 年代後期西海岸で反移民の嵐が吹き荒れている中で、ウィリアムズはカリフォルニア鉄道の建設に大きく貢献した中国移民の権利を守るため、積極的に講演や出版活動を行い、エール大学の教員全体の署名を得た陳情書を起草し、時のヘーズ大統領に説得して、1879 年国会の反移民法案に対する拒否権の発動をさせることに成功した。ウィリアムズの主要論点は、1868 年天津条約の改正条文で保障される中国移民の権利を無視すれば、中国で治外法権で守られるはずの米国市民の権利も侵害される恐れがあるということ

にあるが、その論調の根底には、両国間においてある種の双務的で対等的関係を構築すべきだという発想が存在したと考えられよう。

東アジア伝統文化に対するウィリアムズの賞賛は、『中国移民』と題する彼の論文に最もよく現れていると言える。そのなかで、中国人や中国の文明に対するアメリカ人の無理解や偏見を解消するため、彼は次のように述べている。中国人は世界の中で現存する最も古い政府の臣民であり、かつて『旧約聖書』の「詩篇」と「出エジプト記」よりも古い文学を創作した。漢語で表現されている古典の名言が他のどの言語の著述よりも多くの人々に影響を及ぼしている。我々に磁器、シルク、火薬の作り方を教え、我々に羅針盤を与え、我々にお茶の使い方を示し、我々に競争的試験による役人選抜の制度を提供するのがみな中国人である、と。そして、彼は『瀛寰志略』の著者である徐繼畬、日本遠征に参加した広東人通訳の羅森、および日米和親条約の交渉を担当した林大学頭などの開明的思想と進取的精神について高い評価を与えている。徐氏はかつてその親米思想のために福建の地方官職から左遷されたが、「同治中興」の時代（1862－1874）には外務省にあたる総理衙門の役人に抜擢された。これを喜んだウィリアムズは、わざわざ徐氏の尊敬するワシントン大統領の肖像を取り寄せて、それを米国政府名義のプレゼントとして蒲安臣公使によって徐氏に手渡してもらった。

ウィリアムズの数々の善行の背後にある基本的動機づけはいうまでもなく、キリスト教の人道主義観念であつたろう。しかし、これに加えて、植物学に対する彼の深い愛好と研究も彼の人道主義の思想を特徴付けたと言えるだろう。これは、下田滞在中の羅森や、北京に長期滞在した宣教師の **Blodget** 氏の証言で明らかになっている。後者によれば、北京時代のウィリアムズは、花の採取につねに興味津津であつただけでなく、道に出会う知らない平民にもいつも親切で援助の手を差し伸べようとしていた。したがって、ウィリアムズの名前は長く現地の人々の心に刻まれていた、と。